



伊地知文庫
文庫20
419



崇祿迎國新記

多にぬわりてよひ歌わわりてくちのよひを
 一とちりていひまかり来りまよりて又そのつらきゆのい
 きよめをづくしうひよとこらひやうらまはらまひ
 一と多し又は戸をこひ子をわをねこいれりしう
 さちぶ丁まきく人晴をうり晴晴をうくとも飛鳥は
 くらねは押こいよくとも走歌をくらねをわを
 うして文字を作るとわいりなうらうらて字をくらよ
 一とつねにしよのすしよのすしよのすしよのすしよ
 ねしうし世をうらせよのちあけあかといよのいよが
 くらまのいよのいよのいよのいよのいよのいよのいよの
 一とつらきくちのいよのいよのいよのいよのいよのいよの
 一とつらきくちのいよのいよのいよのいよのいよのいよの

田國雜記



天明十八とせ六月下旬のころ山形東部のわづまにて
とてはよしの枝のほとりり作りききよめくはるあむり山
ふしは室所よめひく教獄にふりり流る油をん
よすくろえん聖日東山よ二首の瓦礫をたてまつる

ふきとまをちひるるまぶのぬれふりめを来たならはる
旅衣より志わぶじよのほやうふをうりか
師うー

さいていぢのころの事をもをてわころたては
にらうらやをそたのじよのあむりけをわす
室町屋よ高橋をうまにこりかひはりてりたれ
さいまやうてかんといのの海やうのい

ははるいをまをてくころり

ふーのぬのぢよがまをたわきんまをこりとのとよまて
禪閣を幸ハハ十五とましくころりあひのねまをくころり
させあひたよ銭座すまは耳志ころり鈴よかひはるねね
いりくかひいりかてころりまありくころりまを
ころりく付きく者命よ座し付ねよのころりまを
付きくもすまをひさあ付ころりころりまをころり馬の
ころりひかして骨肉ころりまをころりわりのの禪閣より役を
ころりころり老屋の飯ころり舎初まを付きくまをまりまを
もせらよ付きくころりまをころりあむりひはるまを
て盤砂の席よりてあむりわりてころりまをころりまを
ころり

おひな又おひなもつゝはくちやまのつねおん
わんはまきよにわいては浦生の老の感涙はたつと返歌を
よし作りしはかのま中將の老母はつをうそのふことよ
うらびたれそえ

きこつておんあけりといのふあつたてさね別を神もたれ
日十六日早朝まを谷の草筆をばりいで大系こえよかを
ひきたりと湖湖たれし果のいれあはれをりおあはら
こころいんをきたにわこ世のつひとひもてよ老後の
しうはしらうり位おきもたのたれたはのまよはんとて
とみかたしこの山水のわんはがさるれつるおあはれも
大系こえよあつてしうがたりをまり作る申よ系々院法系經親
神明の御座しころう子うたらつて作りて救別兵をのし

作りしこの社、伊勢大神よてつてをみひるるとうんに山の
大系をなほひおとく神殿よ法樂もより

大系の神はわたりてお歌をうたにのびるるもつゝ光を
うつ川を一見して
あつたおのふあつてくまのうつ川をわきかきもたれつらん
こいひ、朽木よそ作りてしりし。あつたもをあらうてこい
人こころをきく作りて

うらむをなほり作りて山川や朽木のこいよひあがりつ
こいよりま候玉山嶺よいける曹源院とては福院よ宿を
うらむより玄田大膳ちま入道中をうらむとつらりおのまは
巡礼の時もまはりつらりおのまは中人あつておのまは
先僧作りしころ文章うとわらうし。おのまはをまはせ

遠去城門成客来 岩房何處擁蘿苔
曾遊此地都如夢 老衲相迎攀小臺

翌日未明一りして侍るありし利禱を見よたをよむ世は
のいりなり 新原法師といふ法師侍り 寺明法師と目
明なりといふ連影の帝をていひくわい侍りき 朽木より
佐し侍るうき若光寺と東詣のれをとりとらん 山房と云ふ
やとていふをうきわくかの法師よりかかへる

カゲすこー 早らよるちまのそむいさ記

新原法師

まぢこほゆけき 長乃じりうさん

なう一玉三方といふ赤くも濁くくも海浜をるうちりて
あかきうき海中のうきよいせいといふうきうきをうきよんた

かてこひの松原うらさてうき坂といふあまそひはきや

こりやまたにやまたねをうき坂といふあまこひの松原

よのふくをうらさてをうきうき坂といふあまそひとて

せいのこのころまたうらさてのなまわきの名もうらさてをうら

哉前玉はるがうきうき坂といふうきうき坂といふあまそひとて

あまそひとてあまそひとて

あまそひとてあまそひとてあまそひとてあまそひとて

あまそひとてあまそひとてあまそひとてあまそひとて

あまそひとてあまそひとて

あまそひとてあまそひとてあまそひとてあまそひとて

あまそひとてあまそひとてあまそひとてあまそひとて

あまそひとてあまそひとてあまそひとてあまそひとて

里の名をとあつたきこの柳うけあきうきまのふゆはすゝ
か賀の田よほらならさうとしるふよやとけうりはりて

たじくうせさ月の庭のさうりさうりきまやせならこの里
すさ川とついでさのすさ川さうりさうりさうりさうり
をさゆますさすささささささささささささささささ
らぶあめちさすささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ

すさ川にささささささささささささささささささささ
ささよりさささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ

さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ

さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ

さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ

さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ
さささささささささささささささささささささささ

くさなり吉園とくさ新よきとくさゆき

なひうらぶかぶとくさおのむすし
下きい山とくさひてなな馬のきいもた
うと初といふさうりしにみ名をた

まじい夫権のさくじくさな中りなり
こいひくさくさのさくじくさな中りなり

つばくさくさくさくさくさくさくさく
あなへ野の市とくさくさくさくさく
うせをくさくさくさくさくさくさく
つばくさくさくさくさくさくさくさく

閑るよけりなれ

まじい人のまじいのまじい人のまじい
かまじい松とくさくさくさくさくさく
まじい人のまじいのまじい人のまじい
こいひ能犯まじいけりて若きとくさく
まじい見まじいけりて若きとくさく
又木の屋とくさくさくさくさく

まじい人のまじいのまじい人のまじい
四柳とくさくさくさくさくさくさく
まじい人のまじいのまじい人のまじい
小金森とくさくさくさくさくさく

まじいのまじいのまじいのまじい

右井と云ふ浦に浦にまじりてんをてらり
うをまじりてんをてらり井の浦と云ふを
く急の浦と云ふをてらり

こらうらうらうきすまのまはるんはなをを
石部山と云ふに法樂と云ふをてらり

うにまじりてんをてらり石部の山と云ふを
りて越中玉といふる人の森といふをて

幸なんといふ人のりまならんを先のうを
祈りあひといふるに野人といふをてらり
日終よされと神を

わいよまにかいのりらうらうらうらうらう
岩花川といふ大阿倍り板橋といふをてらり

あるちとの山に道といふにいふに川のかげに
大衆といふをてらり宗師といふに教と云ふ
これ人あうけよすといふをて

風といふをてらり山のかげにすまを
りて之山に宗師といふに川と云ふに

この山といふをてらり山と云ふに
聖日下山のほのてらり山と云ふに地獄を
の體大をてらり山と云ふに

てその山といふをてらり山と云ふに
宗師といふをてらり山と云ふに

いふをてらり山と云ふに宗師といふ

宮崎をへりて川に舟をのりて
いそぎをうらむにまがりとくさかた

し書をいそくとすねりて
あまのこころをいそぐりて

いそぎをいそぐりて
七月十日越後のこころまがりと名よつた
塔は貞操軒といふ名をよつて
名坊もつとも相模守
とていそぎをいそぐりて
二首の詠をいそぐりて
いそぎをいそぐりて
日ぬるまがりと
いそぎをいそぐりて
いそぎをいそぐりて

いそぎをいそぐりて
いそぎをいそぐりて

いそぎをいそぐりて
いそぎをいそぐりて

いそぎをいそぐりて
いそぎをいそぐりて

いそぎをいそぐりて
いそぎをいそぐりて

くふこくにがしやうらんをきくよく秋のつゆにやをく
しんせきとて秋のつゆにやをく

山をよむ秋のつゆにやをく

あつしんせきをけりてくをく

まのほろけはもほろけいしんせきのつゆにやをく
この秋のつゆにやをく

いよけりしんせきのつゆにやをく
しんせきのつゆにやをく

あつしんせきをけりてくをく
まのほろけはもほろけいしんせきのつゆにやをく
この秋のつゆにやをく

あつしんせきをけりてくをく
まのほろけはもほろけいしんせきのつゆにやをく
この秋のつゆにやをく

あつしんせきをけりてくをく
まのほろけはもほろけいしんせきのつゆにやをく
この秋のつゆにやをく

あつしんせきをけりてくをく
まのほろけはもほろけいしんせきのつゆにやをく
この秋のつゆにやをく

つらき心ふらふ人よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ
又すまきをとけけつて

なほひつらふあし人の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ
わが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ

早ふ心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ
なほひつらふあし人の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ

わが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ
なほひつらふあし人の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ

わが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ
なほひつらふあし人の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ

詠 天日

よあきの月にやあはれうらうらやうらうらやうらうらやうらうらやうらうら

夕麻

わが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ

詠 店よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ

孤館 殘燈 欲五 更 暗蛩 切々 夢難成

故人 記取 不平事 日々 寒垣 想洛城

山をこえすきて浦ちくくわたりきたるにき景をうらみ

見く侍りたれど感身にまじりし和漢古廟口ままうせたる

空 赫尚 臨 雙 鬢 花 江山 但 跡 故人 遊

孤 帆 明 滅 暮 煙 外 落 日 天 遠 存 陳 軛

わが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よとてわが世の秋の心よ

上 総 玉 千 種 の 涙 としつるふよそいふ貝ををむらひて

聖 阿 比 羅 寺 の 涙 の うつ せ 貝 海 へ 秋 の 花 よ り 丸 う

孫井の原とて新まて所見をむく

ふるいふをむくむく井のたむを捨ちて
吉聖卿とてありて王の御の花をまにたして
うへせなむとていふ

あどまたはわりたりとていふ
一と口よりいふて俳諧

鹿聖山とて道場にて

あ方國清流山よまて通ねしはり

わらうきのたむをむくむく

東のく下山一天津といふ

しうしうしうのういふ吹らんをとも
まむしうしうのう

ういふしうしうのういふ吹らんをとも
まむしうしうのう

ういふしうしうのういふ吹らんをとも
まむしうしうのう

ういふしうしうのういふ吹らんをとも
まむしうしうのう

ういふしうしうのういふ吹らんをとも
まむしうしうのう

ういふしうしうのういふ吹らんをとも
まむしうしうのう

こゝろのつらさよとてよからしむるはとて幸傳のこゝろを
てまゝとせよのつらさよとて今も入りてわらわはかゝるは
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
今宵はこゝろに海秋一わらわは名ふふの海秋は
いかにせんといひて

わらわは名ふふの海秋は
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

いかにせんといひてのつらさをいかにせんといひて
いかにせんといひて

多んことしとををさるりきた日たけりなほ

まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと
九月九日聖をさげほくして山よりりくるた葉りしがじ
ろくさきて感緒きまらるる一葉の葉たにまきをを撫しけり
ふい又聖をさげさして仙人とてまきこの花をひきん
七月のこのかきひきまらるる一葉の葉の葉の葉
侍聖の舟をさるりきた

ういんことしとををさるりきた日たけりなほ
日光山よのりりてよある又じり二葉山とていん

まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと
二月山よのりりてよある又じり二葉山とていん
日光山よのりりてよある又じり二葉山とていん
日光山よのりりてよある又じり二葉山とていん

法の水をさるりきた日たけりなほ
法の水をさるりきた日たけりなほ
法の水をさるりきた日たけりなほ
法の水をさるりきた日たけりなほ

まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと
まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと
まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと
まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと

まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと
まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと
まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと
まをうらむるはゆもまらきくはる夕のきくみのもこと

山少く谷のわたりとて
くわつて下しつらむたに
これ人ひひとせしむり

あつし山のやうに
又本坊中禅院よりつぎ

あつし山のやうに
又本坊中禅院よりつぎ

あつし山のやうに
又本坊中禅院よりつぎ

あつし山のやうに
又本坊中禅院よりつぎ

ういよりよとてなひ

ういよりよとてなひ

ういよりよとてなひ

ういよりよとてなひ

ういよりよとてなひ

ういよりよとてなひ

ういよりよとてなひ

ういよりよとてなひ

ういよりよとてなひ

ういよりよとてなひ

るまじしきめてお望みなれりしや

月見つがひひらけりしや
うらうらとあはれ申すはねんや
うらたに東の舞臺にまはりて
者して口をこせりしや

いふせん又いふのうらむと
一

これ迄の扇もさきえん時
ま

わらわらや二社のまのうり
あまし國への御書よつ
ありの傍よとゆりたり

よしとしひゆめはん
かの寺のち寺門福管鑑
そはゆるより

らまらりわらむらうら
あはれまわりの

おはれうらにひねの
は旅者こそ人く月の

うらまをさした月
うらまをさした月

紅葉あらはし
常陸由りしりな

まじりし
法施の次は

ならまひてまゐるらんちりせむやうらんんもまゝのいふ
 梅川を流る竹々ねん紅葉らうらひくはし映れぬとらんく

秋のいろよろらひかきしつゝはつらめばのどをさうつ
 ぢり金山田慶城とて山伏の坊ちやうてまゐる

わくらもてふかあつたのびらびらびらひさかやまねん
 の坊に逗留のあひひいしつゝいづれも中々耐るとて題を
 わくらをもをひるのころ久しうたれなむひすしうちん

又おあむとらうらむと
 金つんぬまこれめまゝや山いぢめよりのいまをさうらひに
 ぬ月廿二日欲詣紅葉波山彦風迅雨大矣仍飛居草廬
 而口龍一鏡

蕭條 竟日 鎖柴門 風雨似憐 吾脚跟

還恨 楓林 斷秋色 明朝山上 祭吟 魂

おま日龍波山は糸清しけうらした初言うてむらば
 うとくしらるゑまんしそん

いりつてとらうらむとらうらむとらうらむとらうらむと
 神あうて詠してはてまつりて

こりりあつてとらうらむとらうらむとらうらむと
 ましたにのめあつと詠せしとらうらむとらうらむと

らんくもはつとらうらむとらうらむとらうらむと
 はつとらうらむとらうらむとらうらむとらうらむと

らうらむとらうらむとらうらむとらうらむと
 ういそあひひいそ

はつとらうらむとらうらむとらうらむとらうらむと
 はつとらうらむとらうらむとらうらむとらうらむと

はつとらうらむとらうらむとらうらむとらうらむと
 はつとらうらむとらうらむとらうらむとらうらむと

又山は八雲のふもとに 霊名傳りひまのなる

まてしをんるのちりのかき *Wanwan*

旅宿も夕麻とてくまのびんくまのむもせむりける

山はけやあめをたててくまのむもせむりける

宿のけりくまをまてよ

秋のふもあつてくまのむもせむりける

曉まるとくまのびん

まてしをんるのちりのかき *Wanwan*

なびのやまのこのあつてくまのむもせむりける

まてしをんるのちりのかき *Wanwan*

ほくまのこのあつてくまのむもせむりける

まてしをんるのちりのかき *Wanwan*

ほくまのこのあつてくまのむもせむりける

ほくまのこのあつてくまのむもせむりける

ほくまのこのあつてくまのむもせむりける

ほくまのこのあつてくまのむもせむりける

ほくまのこのあつてくまのむもせむりける

ほくまのこのあつてくまのむもせむりける

ほくまのこのあつてくまのむもせむりける

九月廿八日 箱根の別荘に 湖水をうらめしく

山色 湖光 秋又 窮 郷書 曾不 説 飛 鴻

砧聲 近報 孤村 晚 旅懷 何堪 憂患 躬

まてしをんるのちりのかき *Wanwan*

まてしをんるのちりのかき *Wanwan*

の如くたにりてわらわの通りたに夜寝るとこまに
のうらむわらわ入殺害し侍りきされりこみおを
異し侍りしかり侍り今れこのうらむて塚の
よならりておひつりて思ひ侍り

佳人 落命 荒原上 蕪底 古硯 空刻名

勿恨 青林 犯花影 浮生有限 辱兼榮

まゝあにたう名をまゝ思ひつりしは
茶の葉をくちりて虫の音はよのこり

むのねのまはあか野をたひひらいたる
わの町影をさうて秋のうらむ草

しつりたにうらむ茶の葉をくちりて
まゝ石を

秋風よ人のねをくちりて
わの少人ののりり着秋紅をたひひて秋よ
と侍りしはあか野をたひひらいたる

うらむ茶の葉をくちりて虫の音はよのこり

むのねのまはあか野をたひひらいたる

わの町影をさうて秋のうらむ草

しつりたにうらむ茶の葉をくちりて

まゝ石を

九月廿五日 あり 旅者より

いづれせんかよふまゝの秋うららむものか
にほひのきこえにいらしむも
十月廿日よもてんかきー

まるといふ名よいふれも 神を月まねてかまひ山あはし
くふよりいふまゝとあまのつらき月まねはあまのまゝいづれか

くふいふまゝのまゝいづれか
よらういづれか舟のうららむと
いづれか舟のうららむと

縮穂をよらしてしきくららに
めをる白穂うららむと

をよらむあまの穂と

川をよらむあまの穂と
岩はまきしと
のころのわらわらむと
ふーの糸のゆきた
海をよらむあまの穂と

あまの穂のゆきた
は里のわらわらむと
中此のよらむと
容をかりしと
ららゆき人よらむと
風情をよらむと

らひてのみちを花のやうまはらりて左様きりきり
にこのやぶをうりてまて衣袂以下の物をとつて一書を
送る結りまはらしたにのりちかきかきしつゝあはるあ
る一やうかきしつゝ世の中にうりてかきかきしつゝ
をうりて思ふも墮して永劫沈滞せんとのうりて先
非んぢきそい悔て思ふも一いつゝかきかきしつゝ
して正途なれどもをうりてかきかきしつゝ
ゆき人ありしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
かよりのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
ともかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
かりあつてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
まよひてあはるも一いつゝかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ

やるお心してまへの悪業をも慙愧懺悔して
の菩提をさしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
古老の人かきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ

いんぎのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
常西の寺まわりのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
ひつゝいんぎのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
ともあつてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
いうてまれのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
まてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
わさつてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
人かきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ
あてがひのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝあてがひのうりてかきかきしつゝ

しめしめ川のほとりやうねりてうねりて水にうねり
りてすくすく川を渡る舟はうねりてうねりて披露す
りての塚のすしあられはうねりてうねりて

あはれのおぼやめおのたまははるはるうねりてうねりて
日影の中はうねりてうねりて人あはる豊砂の身を催
りてうねりてうねりてうねりてうねりてうねりてうねりて
うねりてうねりてうねりてうねりてうねりて

ことしんきくたええよおつ川にわたりておつ川にわたり
はより人あはるおつ川にわたりておつ川にわたりておつ
中りくつちうねりてうねりてうねりてうねりてうねりて
秋の水すくすく川を渡る舟はうねりてうねりてうねりて
次の日あはるおつ川にわたりておつ川にわたりておつ川にわたり

すくすくおつ川にわたりておつ川にわたりておつ川にわたり
てうねりてうねりて

おつ川のうねりてうねりてうねりてうねりてうねりて
うねりてうねりてうねりてうねりてうねりて

うねりてうねりてうねりてうねりてうねりてうねりて
うねりてうねりてうねりてうねりてうねりて

おつ川のうねりてうねりてうねりてうねりてうねりて
うねりてうねりてうねりてうねりてうねりて

おつ川のうねりてうねりてうねりてうねりてうねりて
うねりてうねりてうねりてうねりてうねりて

あはるおつ川にわたりておつ川にわたりておつ川にわたり
てうねりてうねりて

まうこのましよをいふ

あつしらのまうこの里に約うりわしとせうちんりくたま
約林ヨクリンとてふたにりりて中紙のりたにあむしげう
まづのやむをよる業をせきけりまらしんりうとて
侍りまらうかたにまておまひつてか

ほらこれわ月をまておれておまらぬいふとてう約中
新羽をりて薄倉ハセクラのり道すうるくのみをよまて
まらした及び侍りておまらぬいふとて

つまてりたひのりまておまらぬいふとてか
岩井のまをておまらぬ

すまらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて
わらの板とておまらぬいふとて

ゆまらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて
すまらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて
まらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて
まらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて
編念申のりまておまらぬいふとておまらぬいふとて
まらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて

まらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて
扇をりま

秋のまらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて
うつし後のまらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて
まらぬいふとておまらぬいふとておまらぬいふとて

梅之川
おんちやうじやうののふのあはれおのまひやうじやう

梅之川
おんちのあはれおののふのあはれおのまひやうじやう

梅之川
おんちのあはれおののふのあはれおのまひやうじやう

梅之川
おんちのあはれおののふのあはれおのまひやうじやう

梅之川
おんちのあはれおののふのあはれおのまひやうじやう

梅之川
おんちのあはれおののふのあはれおのまひやうじやう

信心肝は銘してなりてきつて是れをとし
當社別當祖師僧正理磨幸久一の傳中
道諭准后号をたぐ大娘意幸といひ古代かの職を補
作りき由緒を雙つることを行ひて神あまを納め
神もいつしの風をいづれにさるるまのまるともか
由井の原まこりてる井をいづれにさるるまのまるともか
作りきつるに

このはあてま建長帝意以下の五山を巡るに作りては
より遊を重伝といふ勝地の作りをまうとのまは遊たの
にきたに漢文あまといふてんてんてん

一かみいんてんてんてんてんてんてんてん

勝山ついでひのころのゆめらんはあつりたんと

冬といふ隙の浦すのころと山くき不とらての好らわ
 を使して時宗のいかりのゆりもよはらりて葉を不望
 してうに庭の葉の黄うらげんでよ。

それとにわりつゝ一えうらいつまうらうらうらと

このまふたに祇名事しとつ健院作りこゝのあつらるさあ
 まで何世うらうらうらと巡れし作り
 このまの悟はあはまうらうらとふ老僧はあをふの悟の由来
 うらうらうらとんこれよと揚き廻の玉のまこれうらうら
 作るこころうらうらひとつと一是とせつらとつと
 て^{えんぢ}熱切うらう芳志よんと作りてまふ下向せんうらうらこの
 僧うらうらと思ふあしてやうらうらとわいせつらつら

中ころとんとつ僧うらうらうらとわらりてはらうらとつと
 この玉窟山あふ寺の霊寶として毎年二月十五日より玉
 うらうらとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 例ありうらうらとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 してつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 四寸ひろさうらうらとつとつとつとつとつとつとつとつと
 とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 は影作りかんつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 肝よりいしてつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

こそとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 る天の道場さいとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

のちりきりきりきり

浮水もうげい4しらの木の世も

首場のめくはうららねはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

梅はのこころのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

こころのめくはるのめくはるのめくはるのめくはる

らしより名根をきりてしるす信せんしてさるるのまゝ
しるすはねんしるす

ふりてせんしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
名根山にわけて今ねに社名に及んぬ聖徳信してさるる
まゝしるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
わけてしるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
かしてしるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ

あいにねねねねねねねねねねねねねねねねねねねねねね
矢よその移して大木あり軍陣しるすのまゝしるすのまゝ
矢を射して吉山を見ゆるしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝしるすのまゝ
わけてしるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ

うらやまのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
うらやまのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ

あにうらやまのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ

田子のまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ
しるすのまゝしるすはねんしるすのまゝしるすのまゝ

久々のわねの川原や。いまなわ官舎はひやふ年のよき
川の入りこをうもはりて

うらやまの川のしりうも見たきは松のうらやまの河
浮きあつたをうも付はし松原をくくはうりてやうく
月をこのはらきん

はらきん松の葉の波をけて月のしりうもひやふ年
足柄山をこも

わうやのいさよひはらきん松の葉の波をけて月の
山いさよひ

いまはらきん松の葉の波をけて月のしりうもひやふ年
うらやまの川のしりうも見たきは松のうらやまの河
浮きあつたをうも付はし松原をくくはうりてやうく
月をこのはらきん

わうやのいさよひはらきん松の葉の波をけて月の
山いさよひ

いまはらきん松の葉の波をけて月のしりうもひやふ年
うらやまの川のしりうも見たきは松のうらやまの河
浮きあつたをうも付はし松原をくくはうりてやうく
月をこのはらきん

わうやのいさよひはらきん松の葉の波をけて月の
山いさよひ

いまはらきん松の葉の波をけて月のしりうもひやふ年
うらやまの川のしりうも見たきは松のうらやまの河
浮きあつたをうも付はし松原をくくはうりてやうく
月をこのはらきん

わうやのいさよひはらきん松の葉の波をけて月の
山いさよひ

いまはらきん松の葉の波をけて月のしりうもひやふ年
うらやまの川のしりうも見たきは松のうらやまの河
浮きあつたをうも付はし松原をくくはうりてやうく
月をこのはらきん

わうやのいさよひはらきん松の葉の波をけて月の
山いさよひ

宿相列大山寺寒之夜無眠而闌寂之餘和漢西篇口號

菘笠何堪雪後峰 山隈無舍倚孤松

可憐半夜還鄉夢 一杵安驚古寺鐘

月がかるをよまきしのうらやまの河
うらやまの川のしりうも見たきは松のうらやまの河
浮きあつたをうも付はし松原をくくはうりてやうく
月をこのはらきん

この山をくらりて、靈山といふ寺ありける本名、某師某本
をしましくくつり 俳借うゝをよめて日影の中よきくさる
猿音のよこいしにたひぬ靈山は某師なりけりあひせり
日向寺といふ山寺は一室一室くよある

山にやゆきけの雲は風さえて名の日うしとくく
熊野堂といふ西にけり道よ山影といふる里はけり山所
のまの地よをけりといふ人よとの人さうけりてくさくさ
いふてうつろふといふといふのとてはあつちのけり
半天といふ山ありやうてをむ

氷なるかたはてい色をこくけうと氷
名もやうー辰の雲をこめてこくけうといふと連歌うとい
よてくさくさ

わら戸路のうらみのせまたうーこえんはけしやこよばら
こやこやといふくさくさはよまきり辰の雲もまをけり
この雲をこくさくさといふがうといふとくさく

くらんてぬ名のいぬさくといふくがくさくさくさくさく
あつ人のいふたにまうてあまひけりてに歌をさくつて二十首
ういよこけりたる

深夜を月

ま秋にわううれあつてうらさうーいぬいぬお秋の月をけり
松言々深

あーさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
思不言言

ませう又かくといえんをいんこもけきたにみなくてまげりん

しほをとりつゝをを廻りつゝた夕のまつりをもんく

夕のまつりをもんくを足せてよりまがしむくのしほのやそ
りうの井ににまがりてよめる今いさ井とていふこ

かへけそがたのふるじやゆやうの井に水はまると
いふまはれこちほくの名をとめてもちまゆををりあ

居せのさしひやそこあつきいよそはり
こころのやせといふ名やうの井に水はまるといひて住ん

こたよりいふ備川はまがりてよめる
こらよりてなをうつははる川里うとよめいさ井とていふ

この川につきてまのの殺わり水はまるといふ
一美しはり又こころの家の門うとまてはるこころ水の流り

方角おまうまといふはくろくをいひていふとさいりて
家くの口いまをたにまてにはるはあてて中よりをいふと

いふまうとていふ形うる風情をいひて西の鏡音まを
こころ山伏の坊ふりて四五日お後いひてつゝた瓦礫も

詠いひる中よ
詠いひる中よ

南歸北去一季闌 露宿風餐總不安
贏得行吟兼詩景 千峯萬壑雪團々

くまも川とつゝ川よ人の移つていひつゝを足て
いふまはれにらうや水のくまも川うのわらうや名にらうん

うつれとのところとあひひてはりてあまきまを月むひひて
吾郷萬里隔音容 一別月持羞不逢

客裡新晴何時是 西山月落曉樓鐘
佐西をうらてはるか大塚の十五う西(まがりて)るまは山いく

まひうらうりりけりらんその根のとまりて

山攀峻險海波瀾 到處多具行路難

踈屋終霄風雪底 凍雞喚夢月西寒

わつ附大石信濃宇とつと氏士の敵にわきいよまうてわそ
いさくに庭あよる割わり矢倉うとをりひうひてけりるや
まを景とくれて牧千里の江山眼のあにつまねとあもるゆ
わうーさうきをとり出してささくさくまを遊鏡ーさた

一間乗興屢登樓 遠近江山分幾列

落鴈叫霜風颯々 白沙翠竹斜陽幽

十五夕坊より人くま二十首秋よるをせけりた

割庭音

わといふふ庭とて人のつこさういといふなんのこらもさう

叢坊後

ばーとある條の志の危のむれとこたなまいふたにる翁は

年月結梅

ころをさうりころよりさうころをさうりさうあまの梅まつん
大塚をさうりして十五まつり

まえまうる玉のりあし今初見よるし

河にえとりまふまいつら完備寺といふ山伏のあに一本松合うて

かきつわんくさうけはくも

このあに常樂寺といふ時宗の道徳坊日中のほとあん
聴聞のいかにまうりくるるに大ぬほとつる

らうととと大回京の水の上た山やわりの名をせとらん

み里に月とつるものあめのはりつらう連歌を

寒燈挑盡夜沉沉 獨臥空牀思不禁
爲我詩神如有感 松風生砌助愁吟
古のわしあまの高山にのかりて偶作

危樓釣上百花鮮 交友無嫌詩酒筵
此地逍遥似何處 礼山亭嶂雪蟬娟
十五日月眉十仙とつもの連歌も好まおけりて切くも身約
し侍りくるとらんあつ時安白雨降りくはえ

まら日のこ山くはもりてあま色
人く十五首のうごめし侍りくると

く名川うせええぬらんゆきうさり氷をつく少ね傷る
懸樋水
志んのかいんやそそのかきねよかひの氷もむらり

燈火似暮

うつこ火のほろこけてしりねくろの光をまたまそら
依汲顯意

山海昭望

てきうわりのこころもものさし人のふるさつねあ
つらこのあまのちしとを屋そ華山もるまか
旅天竺首りしりけりてくまもて常月の根雪梅を射
して偶作

歳云晚急若吾何 白髮蒼顏愁又加
風雪還如感 旻梅映月影橫斜
聖老沃しりる西へ遊夜よまらり多に福泉といふ山
歌もよしきうえをうけいへるに暮暮とくはまの

こゝろにあつたは見えぬ物後

思ひあましのこゝろにあつたは見えぬ物後
この世をさるゝく見くはてはまはるゝの世に
まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ
まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ
まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ

まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ
まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ
まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ
まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ
まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ

樵路言

そりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ

帰郷言

まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ

惜業言

まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ

折不逢言

まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ

述懐言

まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ

まもりてはるゝたにふ川をくさくさくまはるゝ

西泊東漂分幾別 天涯流落屬吟遊

踈鐘遙度野村晚 清梵聲殘江寺秋

因結をさるゝく見くはてはまはるゝの世に

省言

日よまたたけろくつりの村もさむらのちたきなるし
沢畔水き

わーしものわをぬらさるしあつていふものこたかきぬ
賢る未恋

らまうしもしりいひさういふさういふり後いれをぬさく
社院松

すいしーのゆたのきささいものいふあわやちとうらん
あゝ人橋天の郡境を一夜にけりきよしとる里しとれを
庭子よきてつくしーさ

一別長天西又東 殊生、蹤跡轉飄蓬
傍山臨水勞吟歩 訪跡辛酸難得工
えんれ腹下にありまりて閑吟の次に

聖經乾草

かけろふのをめくえんえんはあつらうさみちのつとま

後門帰志

うしーしきさるにとつた松の川わし吹かろる袖乃追風

嘉祥天

こいさより言ぬたのりわーらめいさしとていふ

舊里のまつさういふとて木橋してつとくのあゆりよを梅
を早うまよまりてあまの言月よふしー

冷衣歩月出さ村 函雲探梅風言昏
郷信不臻春信到 臘茶惆悵憶中系

衣別大塚とつとふすはり々々時色清ふ別白履下り
くさて歸書到来しけりこれをさしていふいふひ

一ふいゝ哀慕のうきつたまはつて

從_レ兼君別如_レ寄書 異國天涯千里餘
忽憶_レ陽朝返先_レ落 待_レ来遊子數_レ君_レ諸
連日_レ寄_レい_レく_レみ_レ待_レり_レた_レへ_レん_レ聖_レ母_レの_レ具_レさ_レく_レま_レひ_レ待_レり_レて
こ_レや_レふ_レの_レふ_レく_レも_レた_レや_レひ_レや_レり_レく

向來投錫掩_レ幽扉 平野陰崖片雪飛
想見舊庭殘_レ臘底 記_レ春草木記_レ吾非
哉_レ幸_レの_レま_レ右_レに_レいつ_レる_レぬ_レく_レな_レり_レま_レり_レあ_レり_レま_レり_レま_レり_レ
さ_レら_レう_レう_レい_レと_レる_レこ_レと_レ侍_レぬ_レの_レこ_レ心_レや_レく_レ侍_レり_レま_レり_レ早_レ梅_レを_レめて
わ_レま_レひ_レて_レま_レの_レい_レる_レこ_レと_レは_レ是_レし_レ侍_レり_レま_レり_レま_レり_レ

歲_レ景_レ多_レ管_レ旅_レ客_レ情 在_レ身_レ寒_レ飢_レ憶_レ花_レ京
紫_レ局_レ羊_レ掩_レ柳_レ末_レ雪 一_レ點_レ梅_レ風_レ使_レ家_レ驚

たき火のやうくして十五首のういよと侍りまら

跡屋軍叢

ぬる_レを_レか_レい_レま_レい_レし_レう_レま_レて_レ想_レい_レま_レう_レく_レわ_レり_レる_レ叢_レ花_レを_レま_レり

寄琴亭

ひく_レした_レま_レま_レい_レま_レう_レく_レた_レく_レや_レる_レ風_レい_レん_レの_レま_レり_レま_レり_レ
ま_レの_レ後_レ衣

人_レを_レま_レね_レ花_レの_レま_レい_レの_レう_レい_レ何_レに_レん_レか_レひ_レま_レい_レま_レの_レい_レま_レり

浪多(旅泊)

ゆ_レめ_レら_レま_レい_レり_レか_レの_レな_レれ_レあ_レく_レま_レり_レわ_レり_レま_レり_レの_レあ_レり_レま_レり_レ
先_レ後_レ懐_レ旧

又_レ一人_レの_レあ_レい_レは_レら_レう_レの_レう_レい_レの_レい_レま_レい_レま_レり_レ先_レの_レあ_レり_レま_レり

あ_レり_レま_レり_レに_レあ_レり_レま_レり_レの_レう_レい_レま_レり_レの_レう_レい_レま_レり_レの_レう_レい_レま_レり_レ

雲路隔蹤鴻鴈行 他鄉何耐想家鄉
暗香吹斷故園雪 唯有梅花似洛陽
春色漸搖以く風先をわける日多具かりく竹をこも
より 待人墨客のこころを賞する事よひ竹をわこも
のこ

送望岳寺凡上人 定梅塲柳獨坐
為誰黃竹思函谷 淋霖雨暝一
新
これし骨肉のこもゆりく竹のやりたりて

野水海深映宿影 月風頻動背合枝
喜來生物知歸路 舊里山花最後時
正月一日試筆のこ

あつりりやん喜いこやこころをわこころをわ

と新書太極祝豊年之嘉瑞裁短篇一章矣

嘉瑞報且日瑞書示吉年科識為邦士
歡娛正快也

あつりりやん喜いこやこころをわこころをわ

あつりりやん喜いこやこころをわこころをわ

あつりりやん喜いこやこころをわこころをわ

あつりりやん喜いこやこころをわこころをわ

じき一帯たいて酒のこころをわきまにけりてあそびくらたにけりてあそびくら
あつらえをえて

こころのむかしをわきまにけりてあそびくらたにけりてあそびくら
あつらえをえて

吾此山様似諸君 從渭城別苑 奇香
冷雲流水 隨外愛 自 鬢 黃 梁 手 煮 蔬

嬌者も梅のさきよりけりて一枝をさうてよめる

いづれ香を中とするのこころをわきまにけりてあそびくら
あつらえをえて

とせりけり梅のさきよりけりて一枝をさうてよめる
あつらえをえて

あつらえをえて

一旬此日上遊軒 雲水森然山有靈

殘夜無眠聽春雨 蕭々深院短檠青

次の初る歌は月いさやにけりてあそびくら
あつらえをえて

まろくも梅よさひねの席もな

月別古柳暮 漢

山をくぐりてあそびくら
あつらえをえて

聖日雨よりこころをわきまにけりてあそびくら
あつらえをえて

旅亭春雨日如年 垣野道遠絶往還

贏得嘯吟戰間緒 黃鸝交語問詩筵
又の日はくらく暮らりて人かきこしきえく餘を
たらはくく作りたる

あはれいのかしらんかきこしきえくわいあはれ
十五かきこし紅梅のいろこきえくくくくく

こころさくくくくくくくくくくくくくくくく
かのき^僧翁の質をみまけし作りまかの後に山路に雲
をくけ作り新人橋にゆきくくくくく

日遊相引歩徐く 霜音阻山茶路處
物木橋邊人不見 松間鐘初夕陽初
あはれいのかしらんかきこしきえくくくくく

山あはれいのかしらんかきこしきえくくくくく

聖遊のほろくに大石信流ちる館へ招りし作りて鞠を
真りしておにふたはく二十首のくくくくく

初来老后

あはれいのかしらんかきこしきえくくくくく
帰石函

うきみづきくくくくくくくくくくくくくくく
浦春月

りちちくくくくくくくくくくくくくくくく
さあ申恋

さあていそくくくくくくくくくくくくくくくく
後新恋

あはれいのかしらんかきこしきえくくくくく

大石位傳者父の年三回忌とてあくの追修をいふに
きねむひ侍りたる少経をどの後につきて送り侍ると
らりしに三十三の道のふかしのたにふかきとて
しんせいのまに信ちまじしと侍りしかきしなむりて
しんせいのまにけりしけん信ちまじしと侍りし
こみやしうくすこる侍りしと説者をいふて甲列のむ
き侍るに坊主のよのふかき侍りしと侍りしとて
るをいふとよふしとて

いひしらてすむいふのわいふいふちんたひくふ
りて甲列のむいふて説者の神もいふ事かきしとて
いふ信しとていふとていふとて

信傳とて川のそこの名もたひはるうよ三十字の橋を
とて侍りしとていふ橋に侍りしの後侍りしとて侍りしと
るに侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしと
橋の折損の時をいふに西中の橋をいふと侍りしとて御進
うとて侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしと
くいふとて侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしと

名のいふとて侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしと
あつとて侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしと

はなあつとて侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしと
水の月あつとて侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしと
こみやの風をいふに侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしと
あつとて侍りしとて侍りしとて侍りしとて侍りしと

雲霞漠々渡長梯 四顧山川眼易迷
吟一步誤令疑入峽 溪隈殘月斷猿啼
ほろし玉ころ宿の所しつる所をすき侍りたるおふ
物宿のちまらけんて

いふはてすもをいひてうらなはつるや初宿の里
か尾しとる山寺に一着し侍りたるうの位侍のいそく
後の代のいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく
まうううまうまうまうまうまうまうまうまうまう
うううううううううううううううううううううう

かたのいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく
華蔭城とつる山伏のいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく
左浦礼にまう侍りたるうの位侍のいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく

侍りたるうの位侍のいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく
て

いそくのいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく
又この玉のいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく
いそくのいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく
このいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく
うういそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく

いそくのいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく
いそくのいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく

梅より月をいひ侍りたるうの位侍のいそく
衣田う館をいひ侍りたるうの位侍のいそく
比丘尼のいそくをいひ侍りたるうの位侍のいそく

まじくのももてまじくしつゝおにほをちやちやまじくおにほ
杉木の柳とくく西にいづらひの柳からしてよめおにほに
いづれ又昔にじまねく杉まねく

みらののくらまめ柳りしたえてけの衣にみらうとさか
道まじくぬめ者とひひくらしまらういん中まらうま
らりまじくいん中まらう

らりまじくいん中まらう
かしてくまねれたのしとくまらうまらうまらうまらうま
ねとまらう

あつちまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

ふりやむのり風ふくむるの舟路のちのりかふ
ほり園をこえゆくにほひをかん

名ふれあつて園の下にひびきにたふるまのくれら
そらきの傍をすまひゆるして

うら人しこむしう川をわらねむしうあむらひの
名より川をくよめるこそ

人志をぬ埋まうとんえう川をぬくの世たうしゆ
りの命われうれをりくをえに

うらうれとてぬぬくののじやう

宗祇傳

宗祇者宗元之子也姓中臣氏飯尾具先世居
紀州母藤氏愛無嗣欲得子一百日祈玉津島
明神滿期之夜夢王子入干口而妊閱十有三
月而誕時稱光帝應永二十八年歲在辛丑夷
則念日也宗祇自童州年和歌如飴嗜之不厭
暱就叔父宗砌學習累年頗長連歌萱堂嘉愉
談夢吞玉孕之事宗祇聽焉感為是祥瑞自稱
種王菴杳聞心敬在神維振和歌之名景望不
止乃由南紀而遷北京為北京人盤結草菴于
石倉之長谷師事心敬慣和歌及老莊粗得通
利撮老莊之心自呼自然齋時東下野守常縁

承嗣和歌之傳於父野州益之名翼遠蜚坐レ法
竄役東關宗祇知非其罪歎和歌傳之廢文明
三年發長谷行關左親炙常緣攷々レ請益和歌
之道常緣感其誠至而傳古今集自萬葉集至
新續古今集細繹其中奧義僉以授馬啓迪伊
勢源氏狹衣下紐等物語之秘傳相束囑馬謝
而歸京師徃來五岳肆詩參禪間蒙默雲禪師
鉗鎚終稟許可得意之後不定居處為苒苒客
遊山藪林野間方吟哦而雨至雨濡其衣不知
落魄不羈不凡レ旅泊為家舍四海為兄弟西限
九州而有築紫紀行之作東際與州而有回國
雜記之書每尋名所舊跡勝地靈區凡足跡之

到處無興而作詩歌其徒麋聚影隨就中受其
傳者肖栢素純宗長宗碩等也宗祇有美鬚好
名香燒而熏鬚酷似愛鬚人問其所路訓曰我
詎愛鬚燎香熏鬚則其氣久留氤氳在鼻孔下
不斷聞餘熏耳祇及老邁愁息越之後州二載
宗長至孝欲省宗祇出駿州適越後祇深喜其
孝念長不獲還翌年祇話曰欲濃州有舊識往
彼而終老長聞察祇之情不可止扶持而去越
後道歷草津伊加保要浴溫泉而治沉痾浴畢
赴途途中病洊發寄宿相州湯本郵邸暫展臥
具就枕假寢夢聞定家卿之誦式子內親王之
歌覺後譚旃盍然脫去享年八十又二時後栢

原帝文龜二年歲舍壬戌七月晦日也其明宗
長宗碩素純等擔棺越箱嶺葬駿別桃園定輪
寺栽松于墳墓上末期之事詳出宗長所筆宗
祇終焉記

右迴玉齋祀本書首尾三冊市隱遂朴之札秀而
初為讀後輟日乞吾儿上置昂懷來以寫之早
子時天明八戌甲辰四月

孫安親

